

日本常民文化研究所展示室 収蔵資料展示「大地震となまず絵」

期間：2019年10月1日（火）～11月30日（土）

会場：神奈川大学横浜キャンパス3号館 神奈川大学日本常民文化研究所展示室

収蔵資料展「大地震となまず絵」を企画して

窪田 涼子

日本常民文化研究所では、「なまず絵」を38点所蔵している。本展はこれらの研究所所蔵資料を公開するということを第一の目的としたことに加え、東日本大震災以降、各地で大きな地震が多発している状況下で、江戸時代に都市で起こった大地震とそれに対する人々の心意の記録としての「なまず絵」の存在を、大学生に知ってもらいたいというもうひとつの意図もあった。

まず周知のことではあるが、「なまず絵」について概観しておきたい。江戸時代末期の安政年間（1854～1860）、日本は諸外国から黒船が来港し相次いで開港を迫られるという緊張のなかにあった。その上さらに、全国各地で大きな地震が多発し、なかでも安政2（1855）年10月2日に関東地方南部で発生したマグニチュード7クラスの地震はのちに「安政江戸地震」と呼ばれ、倒壊家屋1万5000戸以上、犠牲者1万人以上と推定されるという甚大な被害があった。そのようななか、江戸の町では風刺版画である「なまず絵」が多数出回った。震災による人々の厳しい生活を題材にしたもの、地震発生の理由や鯰と地震の因果関係、また地震発生源としての鯰に対する憤懣、震災により落魄した富裕層への風刺、反対に復興事業の中で景気が良くなった大工等職人を題材にしたものなどが、擬人化された鯰とともにダジャレやユーモアをもって描かれており、江戸の庶民の間にまたたく間に広まり、およそ2ヵ月の間に250種以上の作品が作られたといわれている。

本研究所に「なまず絵」が収蔵されるに至った経緯は不明であるが、1982年に財団法人日本常民文化研究所が解散した際の一括資料に含まれていることから、アチック・ミュージアム期、あるいは戦後の財団法人期の収蔵と考えられる。収蔵の理由については、長年漁業史・水産史をテーマとしていたことと関連するとも考えられるが、一方でアチック・ミュージアム期から構想・準備された『絵巻物による日本常民生活絵引』が、財団常民期の1964年に完成したことと関連し、上記『絵巻物による日本常民生活絵引』は中世の絵巻物を素材にした「絵で引く辞書」であるが、その流れの中で、近世の絵引が企画され「なまず絵」が収集されたのではないかと考え得るが、いずれも憶測の域をでない。

近年「なまず絵」研究は大きく進展し、また大きな地震が各地で発生し多数の被害が出る中、今後も災害史をはじめとする多様な分野の研究資料として「なまず絵」はますます重要なものとなっていくであろう。

【参考文献】

宮田登・高田衛監修『鯰絵 震災と日本文化』里文出版、1995年
土浦市立博物館編『鯰絵見聞録 大江戸幕末鯰絵事情』1996年
埼玉県立歴史と民俗の博物館編『鯰絵 安政江戸大地震後の世相を伝える錦絵』2016年



写真1 なまづの力ばなし・なまづの夫婦やきもちばなし